

そうか、なるほど。

佐藤二朗のあのおつきな足の組織の中にはこんな感覚も潜んでいるのか。

恐ろしいなあ。

俺も何者かになれる日は来るのだろうか。

明日も大切に生きよう。

小栗旬 「俳優」

困った！ 伝える言葉が見つからない。

「虚ろ」と「嘘」

の二文字が耳にこびりついて邪魔をする。
逃げ切れない痛み、追いつけない悲しみ、絶望、
そして…最後に心の奥底に届くたまらない愛おしさ。
不思議だ。理屈を越えて、無条件にカラダの芯が熱く痺れる。

奥山和由 「映画プロデューサー」

こんなにも心を揺さぶり、ボロボロになった体を
優しく抱きしめてくれる映画があったらどうか。
佐藤二朗監督が描く

ヒリヒリした世界

にドップリと浸ることができた私は幸せだ。
オールタイムベストに入りたい作品！

奥村百恵 「映画ライター」

愛を

さがしてる。

映画を観て、ラブソングを爆音で鳴らして、
僕はどう生きていけば良いのかを考えたのだ。

山口隆 「ミュージシャン」
(サンボマスター)

どうしてもなく追いつまれてしまった人間の究極的な悲劇と究極の喜劇が
同居している。出演している全ての演者さんの芝居に引き込まれる。
間違いなく、二朗さんにしか作れない映画。

ゾクゾクしました。

水野美紀 「俳優」

マグマのようなエネルギーに満ちながら繊細。
泥水を描きながら清冽。汗と暴力の裏に潜む兄弟愛。
陰と陽が共存する不思議な世界。いつたい

佐藤二朗の頭には
何が入っているんだろう？

この島はサトジロのワンダーランドに違いない。

杉田成道 「演出家」

役者さんたちの様々な顔を見る映画だと思う。
表情と言ってもいいが、あえて

「顔」。

それこそが二朗の見たかった、
見せたかったもの
なんじゃないかと思う。

鈴木裕美 「演出家」

今、ほうほうの体で私は島を逃れ、
灰色に荒れ狂う海を渡っている。
島では激しい搾取が繰り返され、
そこで生きる人々は貧しさにたえながら
明日からの明報を待ちつづけた。
島を振り返る。私は、

狂おいしい宴

のような佐藤二朗の最高の物語を愛おしんでいる。

新井敏記 「『SWITCH』編集長」

苦難は乗り越えられる。生きていることに意味がある。
時として、これは残酷な言葉でしかない。

歩けない僕は、昔、自ら命を絶とうとした。
もがき苦しんで、耐え忍んで、その先に、かすかな、

一筋の光明

が見えた。僕は一步一步、自分の人生を、
自分なりに歩んでいるのだろう。
進もう。踏み出そう。少しずつ、少しずつ。

垣内俊哉 「株式会社ミライロ 代表取締役社長」

麻痺なんて贅沢。

苦しみも哀しみも切り刻んで生きろ。

人生を生き抜く為の『言魂』が眩いほどに飛び散っている。
佐藤二朗監督の残酷で瑞々しい愛の人生名言集映画だ。

綾野剛 「俳優」

家族にまともなつくりの呪いの物語。
愛を知らない人たちの、幸せになりたいという
切なる願いに何度も胸を打たれた。

笑え。

今がどれだけ辛くとも。

藤井道人 「映画監督」

二朗さんの裏っ側に世間は

度肝を抜かれる

でしょう
本当に裏っ側なのか
元来こっちが表なのか、
とにかく
名前のごとく朗らかな二朗さんの
影も形もありません
他の演者方も
普段の影も形もありませんでした
映画と言う船で
この恐ろしくも愛おしい島に、いざ

斎藤工 「俳優・映画監督」

私は舞台版の演出を担当しました。
その時の出演者達が映画版で活躍していて、感涙に咽いでおります。
知らない顔なのにたくさんセリフを喋ってるのが、そいつらです。

どうぞ拍手を。

堤泰之 「演出家」

皆が知ってる佐藤二朗だけが佐藤二朗じゃない。
この映画を観たあと、皆が知ることになる。

知って欲しい二朗さんがいます。うむ。

ムロツヨシ 「俳優」

山田孝之を筆頭に出演者、
そしてスタッフ陣までもが台本に宿る
「佐藤二朗成分」にまみれ、格闘した

“化学反応”

が、1カットごとに全篇、スリリングに展開してゆく。

轟夕起夫 「映画ライター」

嫉妬するほど、心をえぐられました。せめて、惜しみなく拍手をおくらせていただきます。

目を背けてはいけない

作品に出会いました。劇場で、また観たい。

安田顕 「俳優」